

満濃町天神地区団体営土地改良総合整備  
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

桜林清源寺1号墳  
桜林清源寺2号墳  
天神七ツ塚7号墳

1996年3月

満濃町教育委員会

# 刊行にあたって

この報告書は、満濃町教育委員会が平成7年度に実施した団体営ほ場整備事業天神地区区画整備事業に伴う発掘調査の記録であります。

満濃町内には、安造田東3号墳を始め約50基の古墳が確認されております。これらの古墳のひとつひとつは、かけがえのない財産であり、後世に守り伝えるにはまだまだ調査し研究しなければならないことが多く、その責務を日ごろ痛感しております。

このたび、農業基盤整備事業に伴う予定地内の埋蔵文化財については、関係各位のご理解ご協力を賜り、変貌の著しい満濃町において貴重な遺跡が存在していることが解明されました。

今後とも、文化財の保護保存と開発との調和をはかり、また遺跡の発掘の成果を現代に活かすべく努力をいたす所存でありますので、さらに一層のご理解とご協力をいただきますようお願い申し上げます。

平成8年3月

満濃町教育委員会  
教育長 桧木 豊



# 例　　言

1. 本書は、土地改良総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、満濃町教育委員会が香川県教育委員会文化行政課の指導のもと、多度津町教育委員会の協力を得て実施した。組織は下記のとおりである。

総　括	満濃町教育委員会	教　育　長	樋木　豊
	"	課　　長	平田　公三
	"	課長補佐	池下　重雄
	"	係　　長	豊岡　悟
	"		松浦　久代
	"	派遣社教主事	橋塚　智教
調査担当	満濃町教育委員会	社会教育主事	平田　友彦
	多度津町教育委員会	"	岡　敦憲
調査補助	地元調査参加者	堀田　秀秋	上里　政勝
		吉川　正春	長尾　昭二

3. 本文の執筆及び編集は調査担当者である平田と岡が行い、遺構及び遺物の実測については岡が行った。
4. 報告書の作成にあたっては、下記の方々の協力・ご教示を得た。記して謝意を表したい。（順不同・敬称略）

片桐 孝浩、笹川 龍一

# 目 次

第1章 遺跡周辺の地理と歴史 .....	(1)
第2章 調査に至る経緯 .....	(3)
第3章 調査の概要 .....	(4)
1. 樅林清源寺1号墳 .....	(4)
2. 樅林清源寺2号墳 .....	(10)
3. 天神七ツ塚7号墳 .....	(14)

## 図 版

# 挿 図 目 次

第1図 周辺の遺跡位置図 .....	(2)
第2図 主体部実測図 .....	(5)
第3図 樅林清源寺1号墳出土遺物状況 .....	(6)
第4図 " 石室内出土遺物実測図(1) .....	(7)
第5図 " " (2) .....	(8)
第6図 " 羨道及び埋土中出土遺物実測図 .....	(9)
第7図 " 近景 .....	(9)
第8図 樅林清源寺2号墳石室プラン状況 .....	(10)
第9図 " 石室プラン及び出土遺物状況図 .....	(11)
第10図 " 出土遺物実測図(1) .....	(12)
第11図 " " (2) .....	(13)
第12図 " 発掘風景 .....	(14)
第13図 " 現場見学会風景 .....	(14)
第14図 天神七ツ塚7号墳石室検出状況 .....	(14)



清源寺古墳1号墳出土玉類



異形須恵器（鈴付き高坏）

# 第1章 遺跡周辺の地理と歴史

満濃町は、香川県中央の内陸部に位置し、讃岐山脈の主峰である大川山（標高1,043m）の北西麓から丸龜平野南部に位置する如意山（標高151.8m）の東麓にかけて53.07km<sup>2</sup>の町域を持ち、東は綾上町・琴南町、南は仲南町、西は琴平町・善通寺市、北は丸龜市・綾歌町・綾南町と境を接している。

町の名は、古代に築かれた平安期に空海（弘法大師）が修築した瀧旣用溜池としては我が国最大の規模をもつ「満濃池」にちなんでつけられている。

満濃町の南部は土器川によって浸食された複雑な丘陵性山間部を形成するが、北部は丸龜平野の南端を占めており、当町の埋蔵文化財はその大半がこの周辺に遺存している。

満濃町域の古墳は土器川東の丘陵地帯に多く見られるが、前期から中期にかけてのものは極めて少なく、公文山古墳・七塚古墳が知られている程度である。

後期古墳は、羽間から長炭にかけての山麓や丘陵部に20基程度の存在が知られており、今回の調査の対象となった清源寺古墳もこの中に含まれる。代表的なものとして、安造田東3号墳・安造田社神前古墳（複室構造）・佐岡古墳（一墳丘二石室で左の石室は複室構造、右に4m離れて開口する石室は羨道部が埋まっており構造は不明であるが、両玄室壁面は共有される可能性がある）・断頭古墳（ドーム型石室）など極めて特徴的なものが多く含まれることが知られているが、これまでに本格的な調査と言えば、安造田東3号墳だけであり、未確認の古墳も数多く残されている可能性が高く、この地の調査は今後の課題とされている。



第1図 周辺の遺跡位置図

## 第2章 調査に至る経過

清源寺古墳は、満濃町大字長尾地区に群集する後期古墳群の中の一つで、この地区的古墳は水田・山林中などにあり、その大半は私有地である。

平成5年4月23日、満濃町土地改良区から、満濃町大字長尾（天神地区）に対して農業基盤整備事業の開発申請がなされた。当該地周辺には古墳が多いため、殆どの所有者は古代人の墓である古墳を認識しており、町土地改良区からの申請も古墳の処置についての問い合わせに始まっている。

満濃町教育委員会は、古墳の処遇について香川県教育委員会の指導のもと平成6年8月8日から11日にかけて現地でのトレンチ調査を実施したところ、墳丘及び横穴式石室の遺存状況は比較的良好であることが確認された。

その後、古墳の取扱について、町土地改良区担当者と協議を重ねたが区画整備していく過程ではどうしても古墳の保存が困難であることから工事に先行して、発掘調査が不可欠となった。

しかし、町教委には埋蔵文化財専門職員がいなかったため、香川県教育委員会文化行政課との話し合いの中で、独自に近隣関係機関と調整し、多度津町教育委員会の協力を得て、調査を実施することとした。

調査は、平成7年12月13日から平成8年3月31日までの予定で同古墳及び天神七ツ塚7号墳を調査することとなったが、調査と並行して行った隣接地踏査調査の結果、事業対象地区内においてわずか20mの地点からそれまで存在が知られていなかった古墳を確認したため、合計3基の古墳調査を実施することとした。

なお、樺林清源寺古墳を樺林清源寺1号墳、新たに確認した古墳を樺林清源寺2号墳と呼ぶこととした。

# 第3章 調査の概要

## 1. 樺林清源寺1号墳

### (1) 墳丘

本古墳は、北西及び西部が削平を受けており、必ずしも状態のよいものではなかった。

墳丘落ち込み部分の明確な確認はできなかったが、形態は円墳であり、大きさは12m前後と考えられる。

また、墳丘天頂部の古墳盛り土はある程度削られ、斜面上部すなわち北東部は平坦な畦道となるよう墳丘上に盛り土が施されていた。

墳丘上からは、鎌倉・室町時代前後の羽釜片等を出土した。当古墳に伴うと思われる遺物の出土はなかった。

墳丘の構築にあたっては、自然の丘陵を成形しながら構築したためか、やや帯状が乱れながらも、版築工法を用いていた。

### (2) 埋葬施設

内部主体は横穴式石室で、玄室床面プランは一辺約2m10cmの胴張り方形型であった。高さは約2m30cmを計り、持ち送りによりいわゆるドーム状を呈していた。石材は、そのほとんどが河原石であったが、一部（奥壁基底石及び側壁の一部）に花崗岩を用いていた。

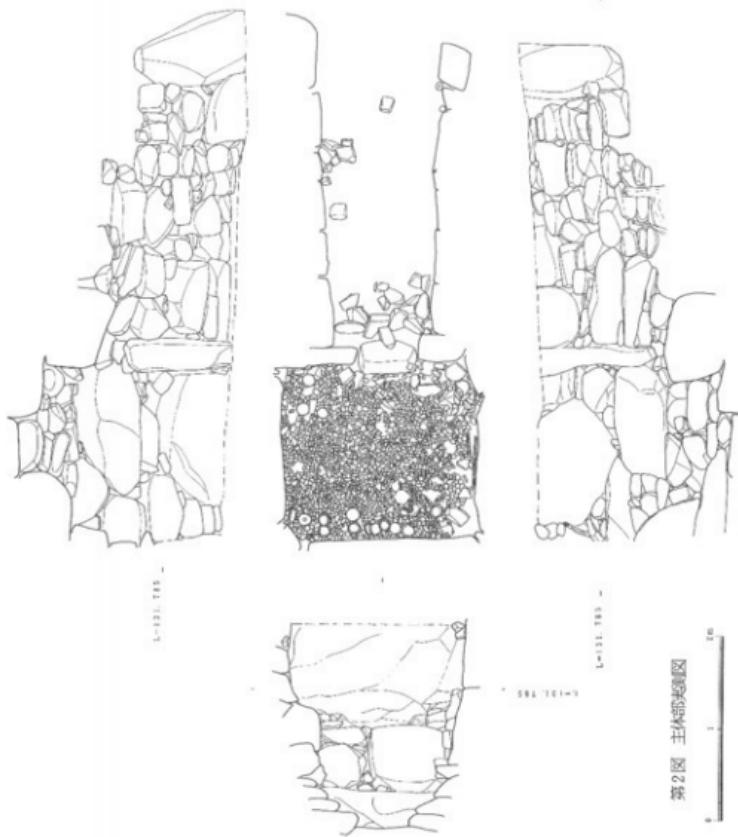
また、このドーム状の石室をもつものとして、徳島県の段の塚穴古墳があり、当古墳はその流れを組むのではないかと考える。

羨道部は長さ3m60cm、幅1m10~20cm、小口積みであり、羨道部においても若干の持ち送りを呈していた。

また、天井石は持ち送りのため、2石で形成していた。

床面は、ある程度の規則性により、直径20cm前後の平たい河原石を敷き、その上に1~2cm大の小石をアットランダムに敷き、床面を形成していた。

排水溝は、石室の周囲を巡っていたが、羨道部では確認できなかった。



第2圖 主体部构造圖

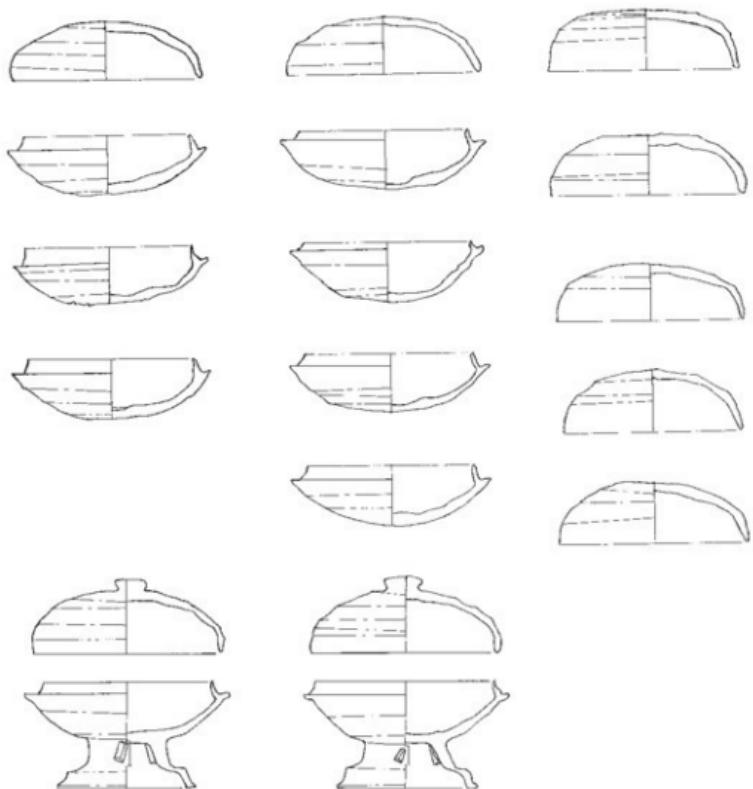
### (3) 遺物

玄室内及び羨道部における出土遺物は、須恵器、装身具、武具等であった。玄室内では、環蓋・身、高環蓋・身、小玉、切子玉、管玉、勾玉、なつめ玉、刀子、鉄鎌及び人骨歯等が出土。羨道部においては、土師器碗、提瓶、鈴付き須恵器（完形品でないうえ、同型の出土例があまりないので、器形については不明であるが、残存部からの推定として、仮に『鈴付き高環』と呼称したい。）が出土した。

また、埋土中からは黒色土器A類、須恵器壺等が出土している。

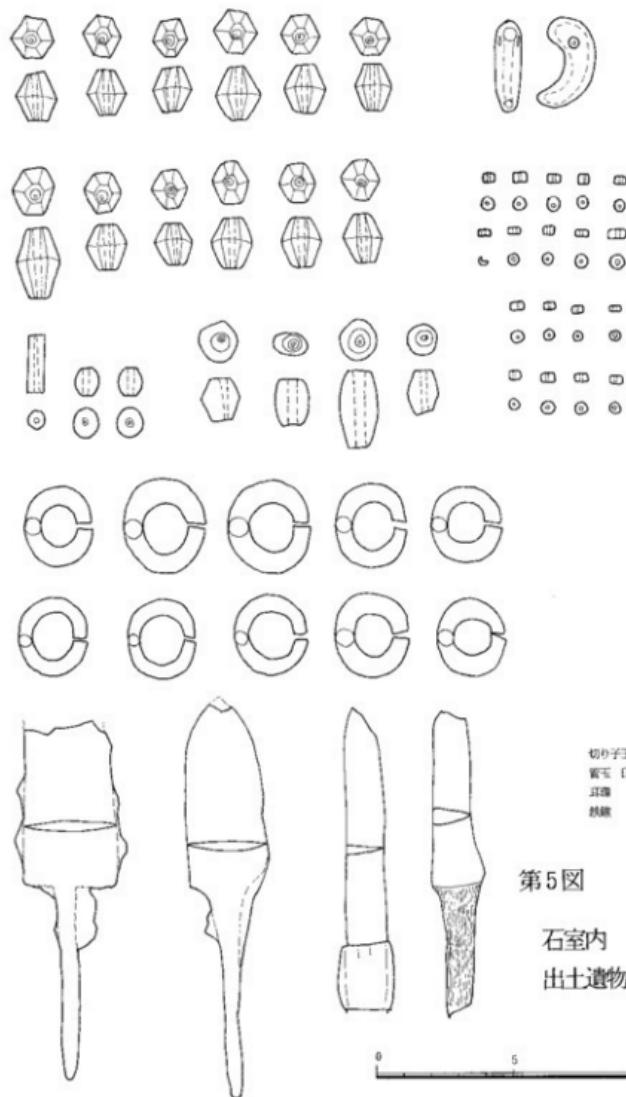


第3図 出土遺物状況  
(6)



第4図 石室内  
出土遺物実測図(1)

0 10 20 cm





第6図 羨道及び  
埋土中出土遺物輪廓図

#### (4)まとめ

本古墳は、調査当初における付近住民の聞き取りによると、羨道部天井石を隣接する神社の石燈籠の石材として転用されていたり、石室を住居としていた人がいたという伝承があったりと石室内における遺物の出土が難しいと思慮されたが、遺物等から、当古墳は7世紀初頭のものと思われる。

また、『鈴付き高環』という特異な須恵器及び土師器碗の出土から本古墳の被葬者は、近隣の文化とは異なった文化をもつ集団の長であったのではないかろうか。



第7図 1号墳近景

## 2. 櫻林清源寺2号墳

### (1)形 態

地盤整備のために耕作土及び末土を除去したところ石室根石の一部と若干の須恵器片を確認し、古墳の存在が明らかとなった。

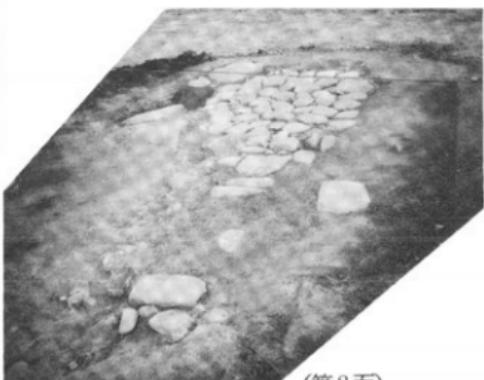
古墳の規模については、削平がかなり進み、周溝の確認ができなかったため不明である。

### (2)埋葬施設

内部主体は両袖式横穴式石室である。玄室床面、奥壁及び左側壁の根石が残存するにすぎなかった。



(第1面)

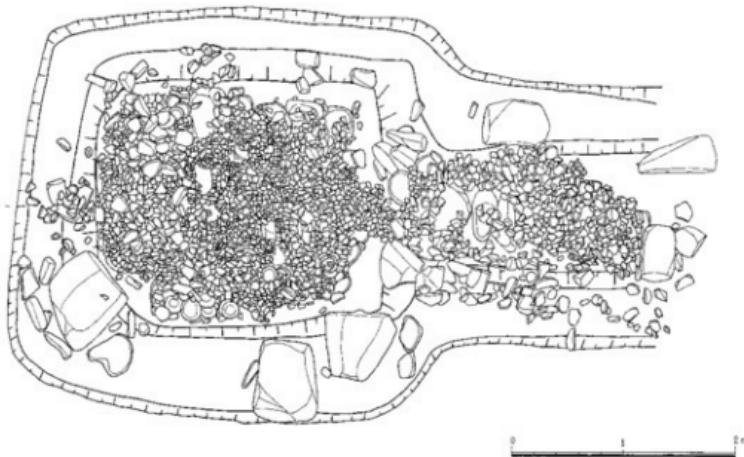


(第2面)

第8図 石室プラン  
(10)

幅の狭い羨道と長方形の玄室からなり、両袖式石室であった。石室全長は、玄室長 $2\text{m}25\text{cm}$ 、玄室幅は約 $2\text{m}10\text{cm}$ であった。羨道長は、 $2\text{m}60\text{cm}$ 、幅 $90\text{cm}$ であった。墓道の確認はできなかった。

石室の構築にあたっては、地山直上に $1\sim2\text{cm}$ の明灰色粘質土を張りつけ偏平な河原石（直計 $30\text{cm}$ 前後）を規則正しく並べ第1床面を形成していた。その上には、奥壁から $1\text{m}$ のところまでは $3\sim10\text{cm}$ の礫、 $1\text{m}60\text{cm}$ までは $1\sim2\text{cm}$ の礫、そこより羨道部までは $3\sim10\text{cm}$ 前後の石が使用されていた。玄室内における排水溝は確認できなかったが、羨道部には中央に掘りこまれており、U字を呈し、上面を石材で被覆し蓋石の役割を果していた。



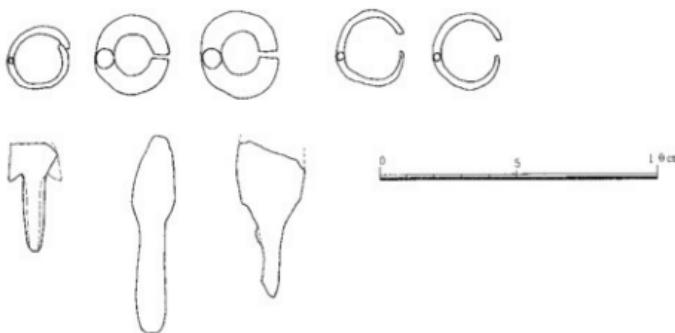
第9図 石室プラン及び遺物出土状況

### (3) 遺物

床面上部が削平されていたにもかかわらず、遺物の残存状態は良好であった。

玄室内より、須恵器、装身具等が出土。その内容としては、環蓋・身、鏡、小玉、土玉、耳環。羨道部からは、用途不明鉄製品が出土した。

环蓋・身は両側壁際に玄室中央部から奥壁にかけて出土。小玉及び土玉は奥壁際中央部付近から集中的に出土し、耳環は玉類出土地点から玄室入り口にかけて出土した。



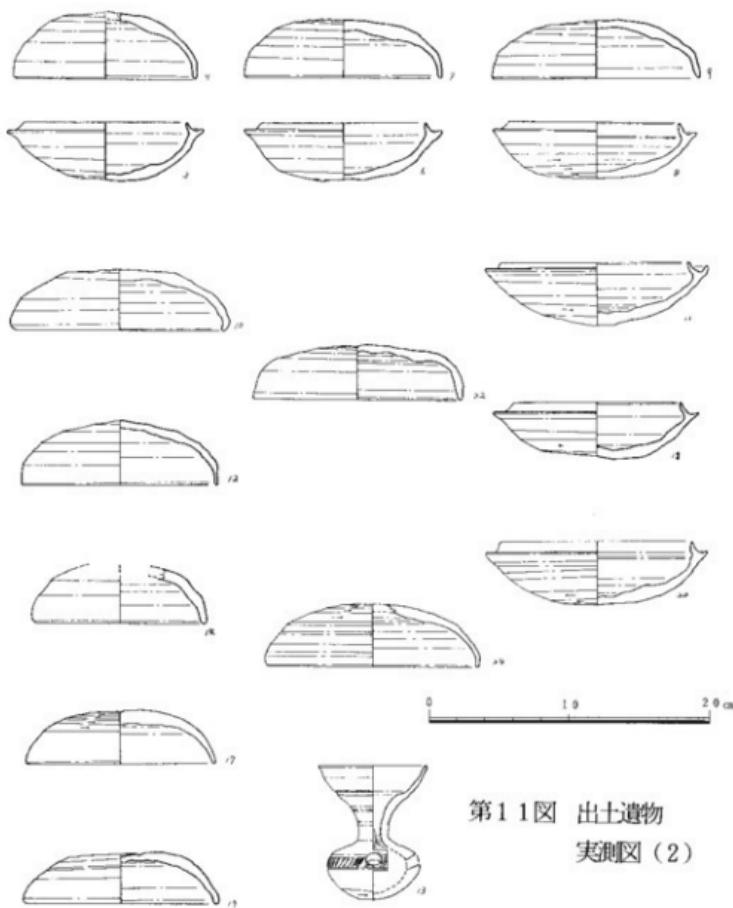
第10図 出土遺物実測図(1)

### (4)まとめ

本古墳は、水田耕作により削平を受け、現状では全く起伏が認められず、所有者自身も気づかなかった状態であった。また、耕作時においても遺物が出土したこととなかったとのことであった。耕作が石室床面に達していなかったことが幸いし、出土遺物は比較的多くあったことが、収穫でもあった。

本古墳における特徴の一つとして、玉類・耳環が出土したことであろう。耳環は5個出土し、1対は銅線を曲げただけの簡単なものであった。この簡単な作りの耳環は、長砂古墳において確認されている。

須恵器(环蓋・身)等から考察し、本古墳は7世紀初頭のものと思われる。



第11図 出土遺物  
実測図(2)



第12図 発掘風景



第13図 現場見学会風景

## 2. 天神七ツ塚7号墳

### (1)埋葬施設

円墳。内部主体は竪穴式石室である。石室全長は、4m60cm、東壁幅75cm  
西壁幅44cm、高さ65cm(推定)であり、床は粘土を張っていた。

### (2)遺物

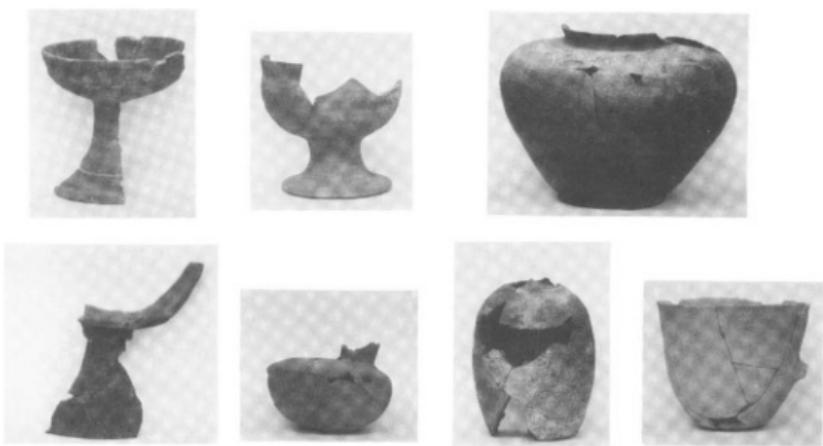
皆無であった。



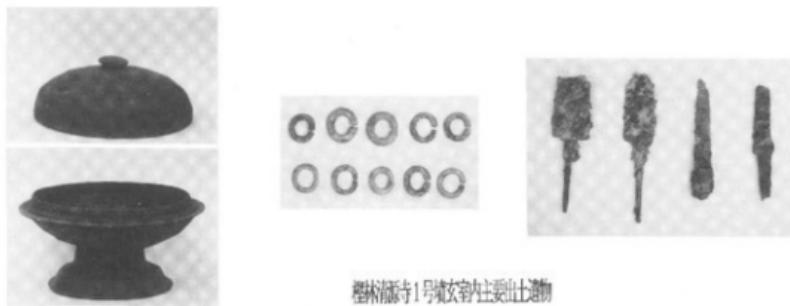
第14図 石室検出状況

# 図 版





磐林寺跡1号墳出土物



磐林寺跡1号墳出土物



磐林寺跡2号墳出土物

**檍林清源寺1号墳  
檍林清源寺2号墳  
天神七ツ塚7号墳**

**1996年3月31日発行**

**編集発行 満濃町教育委員会**  
香川県仲多度郡満濃町大字吉野下281-1  
郵便番号 766 電話 0877(73)3111㈹

**印刷 有限会社桂華堂**  
香川県仲多度郡琴平町619  
郵便番号 766 電話 0877(75)2015